

学術誌編集プロセスに関する提案 —JALT Journal の事例から考える—

浦野 研
北海学園大学

Keywords: 学術誌, 編集, 査読

1. はじめに

本稿の目的は、筆者のこれまでの学術誌編集・査読経験を振り返り、現在日本語編集者を務めている *JALT Journal* の編集プロセスを国内の他の英語教育系学術誌と比較することをとおして、より良い編集方法のあり方について考察することです。ひとりの経験に基づく個人的な考察・提案ですので、これが正しいものと受け入れるのではなく、議論のたたき台と考えていただければと思います。

2011年度は偶然にも私にとって査読の当たり年でした。*JACET Journal* (大学英語教育学会), *ARELE* (全国英語教育学会), *Studies in Language Sciences* (言語科学会), *Second Language* (日本第二言語習得学会), *CELES Journal* (中部地区英語教育学会), *HELES Journal* (北海道英語教育学会)への投稿論文の審査をさせていただきましたが、投稿や審査に関する取り決めは学会ごとに異なるので、投稿論文とともに送られてくる査読方法の指示に従う形で審査を行いました。また上記のいくつかの学会で運営委員会に出席していることもあり、学会ごとの論文審査方針の違いについて意識するようになり、論文あたりの査読者数や、採点方式、(得点以外の)講評の審査判断におけるウェイト、掲載可否の判断基準などについて思いを馳せる一年となりました。

また、私は2010年秋より日本語学教育学会が発行する *JALT Journal (JJ)* の日本語編集者を務めており、投稿されてくる日本語論文の受け付け、査読者の決定、査読依頼、掲載可否の決定、編集・校正補助といった形で同誌の発行プロセスに関わっています。後述のとおり、*JJ* の編集プロセスは国内の他の学術誌とは異なる点が多く、*JJ* に特有の編集方法を紹介し、その中にもし良いものが見つかれば他の学術誌でも取り入れていただくことを提案したいと思います。

2. *JALT Journal* の編集プロセス

2.1 概要

JALT Journal は、日本語学教育学会 (The Japan Association for Language Teaching: JALT) が発行する学術誌です。JALT は1975年創立で会員数はおよそ3,000、アジアでも最大規模の英語教育系学会です。元が日本に住む英語母語話者教師が中心になって組織された学会であるため、他学会と比べて日本人会員の割合が少ないのが特徴で、年次大会や発行物でも基本的に英

語が共通語として使われています。

JALT には主に2種類の定期刊行物があります。そのうちの1つである *The Language Teacher (TLT)* は隔月発行の雑誌で、研究報告の他、実践報告や教材のレビュー、インタビューといった内容を中心に編纂されています。投稿される報告やレビューはすべて査読付きで、実践的な内容が中心であっても質の向上・維持を目指しています。

もう1つの刊行物が *JALT Journal (JJ)* で、現編集長の Darren Lingley のことばを借りれば、“*JJ is the research journal of the organization*” と位置づけられています。年2回、5月と11月に発行される *JJ* は、研究論文とレビュー論文を中心に毎号数本が掲載され、それぞれの論文は2人以上の査読者により、いわゆる *double blind review* の形で審査されます。私は2002年より *JJ* 日本語投稿論文の査読者を務めており、毎年1、2本の論文を審査してきました。2010年秋からは前任者を引き継ぎ、日本語編集者として審査を依頼する側に回っています。

次に、*JJ* の特徴をいくつか紹介します。まず、*JJ* は国内の他の英語教育系学会誌よりは海外の学術誌(ジャーナル)に近い形態をとっています。例えば、それぞれの号に掲載するための締切日を設定せず、投稿を随時受け付けています。投稿された論文は所定の手続きによって審査され、掲載が決定されたものから順に編集・校正に回されます。審査がスムーズに進んだ論文は投稿後1年以内に掲載される可能性があります。修正のうえ再審査が行われる場合には、最初の投稿後2年または3年経って掲載される論文もあります。さらに、*JJ* は JALT 会員でなくても投稿することができ、この点でも一般的な国際誌と似ていると言えるかもしれません。

JJ は通常の紙媒体の他に、オンライン版が PDF 形式で公開されています。オンライン版は紙版と同時に発行され、JALT 会員であれば最新号はもちろん、バックナンバーも閲覧できます。また、発行後1年が経過したものは非会員にも公開されており、<http://jalt-publications.org/JJ/> にアクセスすることでどなたにも閲覧していただけます。

JJ のもう1つの特徴は、*research journal* として研究論文のみを掲載している点です。国内の英語教育系学術誌の多くは、「研究論文」と「実践報告」というセクションを設け、教育実践に関わる原稿も受け付けていますが、JALT は実践的な原稿を *TLT* で集中して受け付けることで、*JJ* を実践報告を含まない研究誌として発行する形をとっています。

最後にもう1つ挙げるとすれば、それは *JJ* の低い採択率でしょう。*JJ* 全体の採択率は10%程度と言われていますが、ここ数年はそれよりも低い数値で推移しているようです。日本語論文についても、私が編集を担当するようになってからの3号で3本が掲載されましたが、この間に私が受け付けた論文は、再投稿のものも数えれば延べ30本程になります。具体的な審査基準については次のセクションをご参照ください。

2.2 編集プロセス

それでは、*JJ* の編集プロセスを、時系列順に紹介していきましょう。前述のとおり、*JJ* では投稿を随時受け付けているため、投稿者は論文が準備でき次第編集者(私)宛にメールで必要書類

一式を送付します。編集者としての最初の仕事は、送られてきた書類に不備がないかを確認し、投稿者に受領確認の連絡を入れることです。

投稿を受け付けた論文は、編集委員会による予備審査を受けます。この段階では、論文が投稿規定に合致しているかどうかと、内容が *JJ* に相応しいかを中心に審査し、査読に回すことが適当かどうかの判断を下します。*JJ* の投稿規定は基本的に *Publication Manual of the APA* の最新版に準拠しているため、投稿する側も審査する側も *JJ* のためだけに特別なルールを覚える必要はありません。また、予備審査の段階で *JJ* への掲載は難しいだろうと判断することもあり、その場合には査読をせずに、投稿者に理由を添えて不採択を通知します。

投稿論文が投稿規定に合致していると判断した場合、2名の査読者による審査に入ります。*JJ* には Editorial Board として査読をお願いできる方のリストがありますが、実際には編集者が相応しいと考える査読者を JALT 内外を問わずその都度探し、個別に依頼をしています。適切な査読者の選定は学術誌の質を維持するために最も重要なプロセスのひとつですが、*JJ* ではこの手続きについてマニュアル化されているわけではないので、現日本語編集者として私が取っている方法をここでは紹介したいと思います。

2名の査読者を選ぶにあたって私が意識していることが3点あります。第1に考えるのは、やはりその論文が扱っている分野に詳しい方を探すということです。具体的には、投稿論文の引用文献欄をチェックしてその中に査読を依頼できそうな方がいないかを探したり、類似したテーマの論文を書いている研究者がいないかを探したりします。そうはいつでも *JJ* には外国語教育研究に関連する様々なテーマの論文が投稿されてくるので、中には私の守備範囲外の論文が届くこともあります。そのような場合には、私の知人の中でその分野に詳しくて信頼のおける方に相談し、適切な査読候補者を推薦してもらうこともあります。

査読候補者を探す際にもう1つ重要なのがメソドロジーへの配慮です。*JJ* に投稿される論文の中には高度な統計手法を用いたものもあれば、KJ 法などを含む質的研究法を採用したものもあります。また、心理学的な実験のように実施に熟練を必要とするような手法を用いた論文が投稿されてくる可能性もあります。学術誌としての質を維持するためには、論文の内容だけでなく方法論についてもきちんとした審査を行う必要があります。編集者としてそういった審査が必要だと判断した場合には、内容(だけ)ではなく方法論に着目して評価していただける方に査読を依頼します。

基本的には上記2点を踏まえて査読候補者を探していますが、適任な方が見つからないこともあります。そういった場合に助けていただいているのが、私が勝手に「ユーティリティ・プレイヤー」とお呼びしている方々です。前任者からも情報を引き継いでいますが、過去に査読をしていただいた方の中には、分野を問わず批判的かつ建設的なコメントを真摯に返してくださる方がいらっしゃいます。他に適切な査読者が見つからない場合にはそういった方をお願いすることで、研究テーマや研究手法よりも査読の質を重視して安定した審査を目指しています。

実際の査読者選定では、この3点を念頭に置きながらできるだけ多様な意見をいただけるよう配慮しつつ依頼を行います。*JJ* では査読者への謝礼はなく(編集者も無報酬です)、まったく面識

のない方に突然メールで依頼を差し上げることがあるにもかかわらず、幸いなことにほとんどの場合快く引き受けていただき、学術誌の質の維持は研究者の良心に依存する部分が大きいと実感しています。ただし、長期的に見ても特定の査読者に過度に負担がかかることは望ましくないので、ひとりの査読者に対しては査読依頼を年に1本以内とすることを個人的な目安としています。また、学術誌におけるピアレビューの重視という観点からも、過去に *JJ* に論文を掲載した方を査読候補者としてリストアップし、相応しい論文が投稿されてきた時に優先的に依頼をするように意識してもらいます。また、投稿論文の掲載可否の決定には2名の査読者の意見が重要な判断材料となるため、初めて依頼する方に査読をしていただく時には、もうひとり *JJ* での査読経験が豊富な方に願います。査読の質の安定化をはかってもいます。

2.3 評価基準

査読を引き受けてくださった方には、投稿論文をお渡ししてから1ヶ月程度で審査結果をお返しいただくようお願いしています。審査結果には、編集者と著者に宛てた2つの報告があり、それぞれに評価基準が用意されています。

編集者宛ての報告には、次の5点(実質的にはAからDの4点)の評価と、短評が含まれます。

- A. そのまま掲載してよい
- B. 査読者のアドバイスにそって書き直す(再投稿後、1名の査読者と編集者が審査を行う)
- C. 全体的な書き直し(再投稿は前回の査読者のうち1名と、新たな査読者の1名が審査する)
- D. 否決
- E. 書き直し後、他のセクションか *TLT* への掲載を検討する

著者へのフィードバックは、以下の8項目の得点(項目7以外を5段階で評価)と、自由記述の講評の形で行います。自由記述については「批判的かつ建設的に」書いていただきますが、A4用紙数ページにわたる丁寧な講評を書いてくださる方が多いです。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. JALT の読者に合った内容か | 5. 議論・分析と結論 |
| 2. 提示された問題の適切さ | 6. 論文執筆力 |
| 3. 先行研究の適切さ | 7. APA スタイルへの準拠 |
| 4. 研究の枠組み、手法、手続き | 8. 総合的に見たときの論文の質 |

2.4 採否決定

査読者より審査結果が届くと、編集者として掲載可否の判断をする仕事があります。JJ では掲載可否の決定は編集者が責任をもって行います。査読者からの講評を読み、編集者宛ての報告を参考に判断しますが、これまでの経験ではほとんどの場合前述のB(査読者のアドバイスにそって書き直す)またはC(全体的な書き直し)のどちらかに落ち着きます。投稿者向けの項目別5段階評価もありますが、これはあくまで書き直しの参考にしてもらうためのものであり、合計で何点以上なら掲載といった形では使っていません。

JJ に投稿された論文は1回の審査で掲載されることはほとんどなく、多くの場合3回以上の査読を経ての掲載となります。再査読についても基本的には1回目の査読と同じ手続きを踏んでおり、2度、3度と修正された原稿を読むと掲載までに確実に質が上がっていることが実感できます。

2.5 校正

掲載が決まった論文は、proofreaders による校正作業に回ります。JJ では査読者とは別に proofreaders がいて、APA スタイルに詳しい方に書式のチェックをしていただく他、誤字脱字や表現の修正をしていただきます。JJ の proofreading は通常2段階で行われ、1回目は投稿された Microsoft Word のファイル上で行われ、2回目は組版済みの PDF ファイル上で行われます。この間 proofreaders の他に著者と編集者もそれぞれ校正作業を行います。

3. 提案

3.1 JJ の良い点

ここまで、JJ の編集方法を紹介してきました。私個人の意見ではありますが、JJ の方針で好きな点が2つあります。1つ目は、査読後の修正、再審査がしっかりできる仕組みが用意されていることです。国際誌では一般的なことだと思いますが、国内の英語教育系学術誌において、修正後の原稿をきちんと再審査し、必要があればさらなる修正を求められることができるのは、私の知るかぎりほとんどありません。再審査に時間を割けない一番の原因は、投稿締め切りから学術誌の発行までの期間が固定されており、複数回の修正を求めるだけの時間的余裕がないことだと思われます。しっかりした再審査を可能にするには、論文掲載のタイミングを柔軟に決定できる仕組みが必要で、JJ はそれを (a) 年に2回発行することと、(b) 締め切りを作らないことで投稿時に特定の号数に対する掲載の約束をしないという2つの方法をとることで実現しています。

前述のとおり、複数回の修正および査読を行うことで投稿論文の質は確実に上がるというのが私の考えです。投稿者、特に若手研究者にとっては、その研究分野の第一人者やそれに近い立場の査読者に論文を丁寧に読んでもらうことができ(しかも無料で!)、コメントに基づいて修正した原稿を2回、3回と読み直してもらえるというだけでも十分に価値あることだと言えますし、査読者とのインタラクションはその後の研究にも役立つことが多いと思います。海外の国際誌であればこういった体験をすることは可能ですが、なにより投稿への心理的ハードルが高いです(国際誌への投

稿については印南, 2011, がとても参考になります), それ以前に海外の学術誌では日本語論文を投稿することはできません。そういう意味でも *JJ* に投稿するのは良い経験になりますし, 後ほど提案するように他学会の学術誌においてもぜひ同様の審査体制を作り出してほしいと願っています。

JJ についてもう1点良いと思っているのが, シンプルな投稿規定です。*JJ* では, 簡単に言ってしまうと文字数(語数)制限以外はすべて APA マニュアルに準拠することとなっていますが, 英語教育研究の世界では APA スタイルが一般化していることもあり, *JJ* に投稿するために特別なルールを覚える必要が一切ないこととなります。国内の英語教育系学術誌の多くは, 主に引用文献欄の書き方で APA に部分的に準拠することを指示していますが, 章立ての仕方やセクション毎の数字の振り方などで学会独自のルールが存在しているため, 論文完成後に再度スタイルを修正する必要が生じます。

APA に準拠するメリットは投稿者の負担削減だけではありません。編集者, 査読者, proofreaders にとっても, 独自ルールなしですべて APA 準拠であれば作業がしやすいですし, 特殊なスタイルを使わないためスタイル上の不統一を最小限にすることができます(国内の多くの学術誌で, 掲載論文が投稿規定を厳密に守れないまま出版されてしまうことがままあります)。

3.2 他の学術誌への提案

最後に, 本稿のまとめとして国内の他の英語教育系学術誌に対して3つの提案をしたいと思います。繰り返しになりますが, この提案はあくまで私の個人的な経験に基づくものですので, 異論がある方もいるかもしれません。また, これは私個人の考えであって, *JALT Journal* としての統一見解というわけではないこともご了承ください。

1つ目の提案は, 再査読の充実です。私がこれまでに査読をした学術誌では, 再査読の仕組みがないために, 私のコメントがどのように反映されたのか(もしくはされなかったのか)がわかるのは, その論文が掲載されてからということが少なくありません(私が修正を期待していたところがそのまま残っていて憤慨した経験もあります)。また, 特にステータスの高い学術誌では, 大幅な修正が必要と判断された論文は即否決と切り捨てる形を取ることが多いようです。学術誌の質の維持という意味では理解できる選択ですが, 若手研究者の成長を支援するという観点からは決して望ましい対応とは言えないでしょう。

再査読を充実させるにはいくつか編集方針を変更する必要があります。まず, 大幅な修正が必要と判断された論文については, 修正とその後の再査読に十分な時間を確保するため, 当初掲載を予定していたよりも後の号での掲載を認める必要があるでしょう。そうすることで, 従来否決とされていた論文のいくつかを救ってあげる可能性が出てきます。ただ, 発行が年1回の学術誌の場合, 投稿から掲載まで2年またはそれ以上の時間がかかることになるため, 研究の新鮮さが失われてしまうという問題も生じます。そういう意味では, *JJ* のように年に複数回発行することで, 満足のいく修正が完成した順に随時掲載することが可能になるかもしれません(私の所属する学会では, *JJ* の他に *JACET Journal* が年に2回発行されています)。

2つ目の提案は、投稿規定の簡略化です。もっと具体的に言うなら、私は国内の英語教育系学会の多くが全面的に APA スタイルを採用するという形で統一見解を持ってほしいと願っています。私も含め多くの研究者は複数の学会に所属しています。学会同士の相互交流や活性化をうながすという意味でも、投稿規定を統一することで、どこに投稿するのも同じスタイルで済むようになればとても便利だし、編集者や査読者の立場としても、どの学術誌でも同じ規定を使っていれば混乱が少なく済みます。現実的には、(研究者個人レベルは別として)学会レベルでの相互交流はそれほど活発ではないですから、簡単なことではないかもしれません。

3点目は、審査時におけるメソドロジーの重視です。国内外を問わず、学術誌に掲載された論文に統計処理をはじめとする方法論上の不備を見つけた経験のある方は少なくないでしょう。Isemonger (2012) が主張するように、不適切な研究方法の使用が広まるのを防ぐのは、学術誌の大きな役割のひとつです。誤った方法論を用いた研究を掲載してしまうことは、その学術誌がその研究にお墨付きを与えてしまうことを意味します。そういったことのないように、編集者は方法論まできちんと目を光らせた査読が行われるよう手配する必要がありますし、場合によっては、学会としてメソドロジーに特化した査読やチェックを行うといった仕組みを作る必要があるかもしれません。

謝辞

本稿は、2012年2月20日に関西大学で開催された LET 関西支部メソドロジー研究部会 2011年度第3回研究会での筆者の発表内容に基づきます。発表の機会を用意していただいた水本篤さん、山西博之さんに感謝します。

参考文献

- 印南 洋 (2011). 「国際誌に掲載する方法」『より良い外国語教育のための方法: 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集』, 100–109.
- Isemonger, I. (2012). Perceptual learning styles and lessons in psychometric weakness. *JALT Journal*, 34, 5–33.